

# 布施の心

(2)

【山田村(2)

本多 克也

(翻字も)

文・徳永 耕一

昭和二十年八月九日午前十一時一分、私たちが小学校の夏休みで山の茶園にいるとき、急に辺りが真っ白になつた。やがて、空に向こうに赤い雲が上がり、気のせいいかつちに向かって迫つてくるように見えた。当時は何のことか分からず、「布田かぶらんでよかやろか」くらいのやりとりを叔母としていた。

しばらくして情報が入つて始める、村の人たちが、「ビカドンばい」とか「すこからしかよ」と口々に噂するようになり、やがて原爆の凄惨な実態が明らかになつた。

母の猛反対もあり、私の養子計画は流れて、それに替わつて従兄弟が茶園を継いだ。もし私がなつていれば、今ごろ茶園の草むしりをしているかも知れない。

山田村の冬の訪れは早い。

「克也、吉田さんちに配達してくれんね！」

母の声が飛ぶ。

私の高校時代の放課後の日課は、家業の手伝いだ。他の生徒のように部活をしたり、友だちと遊んでいる暇はない。授業が終わったらすぐに、楽しそうな生徒たちを尻目に、島原鉄道の帰りの列車に急いだ。

十一月も半ばを過ぎると、陽が陰った夕暮れ時には、栗林地区はもう気温が十度近くになり、ビール箱を持つ手はかじかんでくる。

ビールはその頃は大瓶で、二十四本入りの木箱は学生にとっては半端なく重い。落としてしまつたら大変なことになるので、一箱ずつ慎重に自転車の荷台に積み上げ、三段になると私は配達に向かつた。配達用の自転車は古く、タイヤは硬くてクッショーンはない。

最初の頃は慣れずによらついたものだが、高三の頃にはすっかり慣れて、舗装していないガタガタ道を器用なハン



2023年3月本多産業株式会社は  
設立50周年を迎えます。



**本多産業株式会社**

【本社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814  
TEL:045-869-1133  
【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677  
TEL:0957-38-3520

ドル捌きで運転できるようになつた。  
それにして、私は手伝いをしながらいつも腹立たしく思つていた。

「なぜ、俺と母ちゃんだけが働くんといかんと!?

兄は家に帰つてもすぐにどこかに遊びに行くし、父も昼間家を空かすことが多い。戦前の金回りの良さを引きずつていたためか、父はあまり労働に対する意欲が無いようになえた。

小さな酒屋は、ほとんど母の細腕と未成年の私の配達にかかるついたのだ。

ある日、母のいない時に祖母たちがしゃべっているのを耳にした。

「嫁に来たら女中といつしょたい、使わな損」

日頃、祖母や叔母たちが母に強く当たることは私も感じていたが、この言葉で、彼女たちの母に対するイジメをハツキリと認識した。

それ以来、私は意識して母を庇おうとしたが、その度に私に対しても冷たい目が向けられ、「このくそがきが」とけなされた。

あるとき、母が味噌汁のダシに使つた煮干しを佃煮にして食膳に出したら、食べた後、「ほんなの食えん」と、叔母が吐き捨てるよう言いながら、空の器を母につき返した。その光景が今でも鮮明に記憶に残つている。

「俺の母ちゃんをなんでこんな目に合わせんといかんと」と、私はひとり憤つた。母の何がそんなに気に入らなかつたのか未だに分からぬのが、当時は嫁の立場が低かつたことに加えて、曲がつたことが嫌いな母の正義感が皆の鼻についたのかも知れない。母はイジメに堪えかねて、長崎市の実家に二、三度逃げて帰つたこともあつた。

結局、母は四面楚歌で、身内には誰も味方がいなかつた。

私を除いては……。